

ヒトゲノム解読に向けて世界が動き始めた1980年代末、日本でもゲノム研究のために大型の科研費が設けられた。91年度からの10年計画を見据えた検討が始まった。

研究班は、実験技術の改良など多数の研究課題を全国の大学に振り分けた。同時に、大量のDNA解読とデータ解析を担う「拠点」をどこかに設置する必要があった。DNAデータバンク構築と同じように、大学や研究所にとつては規模拡大のチャンスである反面、研究の下支えという

## 拠点の受け入れを拒否

イメージに強い反感を抱く研究者も少なくなかった。

日本DNAデータバンク（DDBJ）を擁する国立遺伝学研究所（遺伝研）は、

ゲノム研究拠点の有力な候補であった。遺伝研は84年度から国立大学共同利用機関に改組されており、高度な研究設備や材料を全国の大学に提供する使命を帯びていた。

実際に今日の遺

伝研には、最新の

機器を備えた先端

ゲノミクス推進セ

ンターがある。し

かし同センターが

設置されたのは2

011年のこと

だ。

1991年にゲ

ノム研究の拠点と

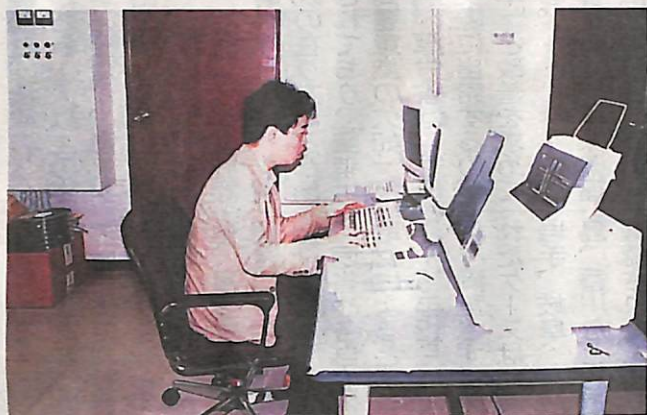
なるセンターが設

置されたのは、東京大医科

学研究所だった。ヒトゲノ

ム解析センターは、90年代

から2000年代にかけて



情報や計算機の分野からゲノム科学へ研究者を呼び込む拠点となり、多くの人材を輩出した。

当初、ゲノム研究班は新センターを遺伝研に置く計画を立てて文部省と調整を進めていたという。しかし予算が確定する直前に、遺伝研所長および教授会がセンターの受け入れを拒否する決断を下したらしい。この経緯をもうすこし詳しく見ていきたい。

（伊東真知子・国立遺伝学研究所特任研究員）

1990年代前半のDDBJ